



特集

コロナ禍の 学生生活



Contents

- 02 特集・コロナ禍の学生生活
- 04 県大生の今
- 05 懐かしの先生からのメッセージ
- 06 卒業生・修了生の活躍
- 10 特色ある研究活動／理事長コラム
- 11 埼玉県立大学と地域社会／学長だより

県大生 × 先生 対談インタビュー

コロナ禍の学生生活

コロナ禍の生活が始まって早2年、少しずつ通常の社会生活を取り戻しつつあります。2022年6月現在、県立大学では感染対策を徹底して、原則対面で授業が行われています。本特集では、コロナ禍で学生生活を過ごす学生にインタビューを行い、制限下の学生生活で感じたこと、気付きなどを語っていただきました。

人と会えることは当たり前前ではないと痛感
会えた時はその時間をもっと大切にしたいです

学部生

矢吹 亜弓 さん

YABUKI Ayumi

Profile

看護学科 4年生
ボランティアサークル「学生ボランティア団体MAGO」に所属



コロナ禍で会う機会がなかったという二人。インタビュー中仲の良さが伝わってきた。

——コロナ禍の学生生活を振り返って

小川：矢吹さんが2年生になるときにコロナの感染拡大が始まりましたよね。

矢吹：はい。まだ1年しか大学に通っていないのに、友達に会えなくなったことが一番大きかったです。学校に通っていたら、小さい変化でも友達とすぐ話せるけど、会えなくなってそれができなくなりました。友達同士で勉強の進捗や就活の悩みを共有できないことが、ストレスでした。周りにも同じ思いの人が多かったように感じます。

小川：皆さん、我慢してしまうんですね。

矢吹：私は、勉強を自分で進めるのが難しくなりました。人の目があると集中して勉強を進められるけど、家で一人だとやっぱり怠けちゃう。テストができない代わりにレポート提出が多かったの、この2年間の勉強が頭に入っているのか不安に思います。

小川：本当に？でも矢吹さんならしっかり身につけていると思いますよ。実習はどうでしたか。

矢吹：見学実習などが多くて、学校での演習の機会もほぼありませんでした。私は臨地実習の経験がないことが不安だったので、2年生の8月に介護のアルバイトを始めました。資格を取得して、移乗や胃ろうの管理、吸引などを行っています。ケアの技術が身につけたいなと思って、今も続けています。新しいことに挑戦する機会に巡り合えてよかったと思います。

小川：素晴らしい！介護のアルバイトをしていたんですね。矢吹さんのように新しいことを始める人は多かったですか。

矢吹：看護学科の学生が、私と同じところで7人くらいアルバイトをしています。仲間同士でケアの技術を磨いています。

——コロナ禍での気付き

小川：ボランティアサークルでは副サークル長として、全体を支えてくれましたね。サークルに加入したきっかけはありましたか。

矢吹：もともとボランティアをやりたいと思っていました。私は福島から来たので、埼玉のことや地域のことを知りたいなと思って。高齢者と触れ合うことも好きだったので加入しました。

小川：先輩になってすぐコロナが広がりましたが、様々な企画をZoom会議を重ねながら行ってくださいましたね。

矢吹：そうですね。社会福祉協議会と協力して、デイ

サービスでイベントを開催しました。デイサービスでは、レクリエーションの内容に困っていたので、Zoomを使ってゲームをして、利用者様と交流しました。試行錯誤しながら大変でしたが、オンラインでもボランティアはできることが分かりました。オンラインだからこそ、今まで繋がれなかった人と繋がりました。

——対面授業が再開されて思うこと

小川：対面授業が再開されましたが、大学に来る機会はありますか。

矢吹：4年生は授業があまりないけれど、4月中は週に1回くらい学校に来ていました。学校に行くために、朝早く準備しようとか、新しい服を買おうかなってという日々の楽しみが生まれたのは良かったと思います。この感覚が久しぶりだなんて。

小川：4年生だと今は就職活動中？

矢吹：そうですね。埼玉での就職を考えています。就職活動のほかに、卒業研究や総合実習の準備と忙しいです。授業はないけど、自分で進めなきゃいけないことがいっぱいあるので、自らを律して頑張っていると思います。計画的にやっていたら、後で自分が苦しめられるので。自己管理の差があるので4年生だと思います。

小川：コロナ禍で学生生活を過ごした経験を、今後どのように活かしていきたいですか。

矢吹：コロナ禍で、友達や家族と会えることが当たり前じゃないと思いました。今後は、友達や家族と会える時に会っておきたいなって思うし、会えた時はその時間をもっと大切にしたいです。

——コロナ禍の経験をどう活かすか

小川：コロナ禍で学生生活を過ごした経験を、今後どのように活かしていきたいですか。

矢吹：コロナ禍で、友達や家族と会えることが当たり前じゃないと思いました。今後は、友達や家族と会える時に会っておきたいなって思うし、会えた時はその時間をもっと大切にしたいです。

小川：人とお会いできるのは当たり前じゃないことを痛感しましたね。一瞬一瞬を大切に、心からの思いで接するって大事ですね。

矢吹：在学中はまだ時間があるから、今のうちに会いたい人がいるなら会っておいた方がいいなと思います。

小川：お話を聞かせてくれてありがとうございます。これからの活躍を期待していますね。

矢吹：ありがとうございます。

私がインタビューしました！

小川 孔美 准教授

・社会福祉子ども学科 社会福祉学専攻
・「学生ボランティア団体MAGO」の顧問



コロナ禍の学生生活で必須アイテムになったという、ノートパソコンとワイヤレスイヤホン。Zoom会議では必需品だ。

——本学の大学院を目指したきっかけ

松下：まずは巖崎さんのお仕事についてお尋ねしてもいいですか。

巖崎：仕事は臨床検査技師として、病院の検査科で働いています。メインで行っているのは血液検査などの検体検査です。コレステロールなどの生化学検査や貧血検査、尿検査、感染症検査など様々な検査をしています。

松下：巖崎さんは本学の博士前期課程も修了されていますよね。大学院入学のきっかけは何でしたか。

巖崎：職場で管理職に就くことになって、今後後輩の指導などを考えなくてはいけないと思っていました。私は専門学校卒ということもあり、それまで研究や教育という手段を学んできませんでした。大学院の社会人枠を目にして、興味を沸かしたことで入学を決めました。

松下：数ある大学院の中から本学を選ばれた決め手はあったんですか。

巖崎：県内の職場から通える範囲という、場所の都合がありました。そのほかに大学院は基礎的な研究が多い印象がありましたが、話を聞くうちに実践的な臨床の課題や問題をテーマに研究できることが分かりました。指導してくださっている松下先生の話と自分の希望が合致したことが一番の決め手になりました。

松下：ありがとうございます。そう言っていただけると私も非常に嬉しいです。前期課程が終わってから後期課程を目指したのは、なにかご自身の考えがあったのでしょうか。

巖崎：最初は前期課程を修了して、仕事継続かなと思っていましたが、修了してちょうど1年後くらいに、県立大学の後期課程で検査技術のことを学べるようになったと聞きました。もう少し研究をやりたいなという気持ちがあったので、先生に相談して進学を決めました。

松下：ありがとうございます。そう言っていただけると私も非常に嬉しいです。前期課程が終わってから後期課程を目指したのは、なにかご自身の考えがあったのでしょうか。

巖崎：最初は前期課程を修了して、仕事継続かなと思っていましたが、修了してちょうど1年後くらいに、県立大学の後期課程で検査技術のことを学べるようになったと聞きました。もう少し研究をやりたいなという気持ちがあったので、先生に相談して進学を決めました。

——コロナ禍での仕事・研究

松下：後期課程に入学したときは既にコロナ禍だったと思いますが、これまでの生活、研究や仕事上で感じていること、苦労したところはありますか。

巖崎：前期課程の修了のときにコロナが流行り始め、私の代は卒業式・修了式がありませんでした。みんな祝えなかったことは心残りです。後期課程に入学し

てからは第2波、第3波とコロナが蔓延していた時期で、職場ではどのように対応したらよいか議論しながら、試行錯誤しました。

でも、学校で感染防御などの授業を受けて知識はありましたが、実践は日ごろから行っているの、一般の方よりはコロナ感染が怖いと思うことはなかったです。

研究に関しては、コロナの影響でなかなか学校に行けなかったり、以前のように気軽に先生と研究の内容について話す機会がなかったり大変でした。その中で良かったことは、授業がオンラインになったことで職場から受講できたことです。場所や時間を超えて授業を受けられたことは良かったです。もちろん大学の先生方や職員の方々に、いろいろ工夫していただいたことが大きいと思います。

松下：職場の検査室の中での患者検体を使う研究をしていたと思いますが、病院内での研究活動にコロナ禍の影響はありましたか。

巖崎：私の研究は血液検査で採った血液を使うので、人を対象にしている学生や研究者に比べたら、コロナの影響は少なかったです。自分の施設の分析器を使いながら早め早めに研究を進めました。

——リカレント教育の良さ

松下：巖崎さんはこれまで仕事をしながら大学院で研究を続けてきましたが、振り返ってみていかがですか。

巖崎：実際に現場に出て、現場で疑問に思ったり、自分に足りないな思ったりすることがありました。県立大学の大学院は、社会人と大学院生を両立させている方が多いので、難しそうだと考えないで指導して下さる先生と相談しながら、チャレンジすると良いのかなと思います。実際に現場で体験したことは、大学院で学ぶときにかなり役に立ちました。社会人は時間の制約がありますが、その分効率よく研究を進める方法を考えられます。

松下：巖崎さんは博士号を取って、その知識をどのように活用していきたいですか。

巖崎：無事修了して博士号を取得したら、職場に自分が経験してきたことや、研究的な視点や考え方を伝えていきたいです。普段仕事で疑問に思うことなど、まだまだ沢山あるので、それを明確にしながら研究活動を続けていこうと思っています。

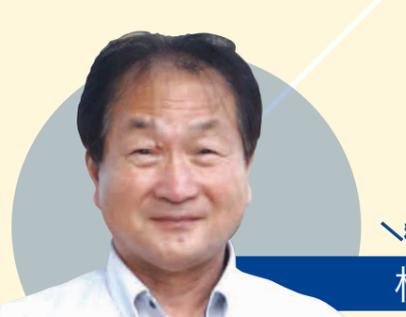
松下：修了まで頑張ってください。ありがとうございました。

巖崎：ありがとうございました。

私がインタビューしました！

松下 誠 教授

・健康開発学科 検査技術科学専攻
・巖崎さんの研究指導教員



授業がオンラインになったことで場所や時間を超えて
授業を受けられたことは良かった

大学院生

巖崎 達矢 さん

IWASAKI Tatsuya

Profile

博士後期課程 2年生
本学大学院博士前期課程修了



研修会で知り合ったという二人。考え方を共有するために、アニメや漫画の話をするこもあるという。

授業編

本年度もたくさんのお新入生が埼玉県立大学の一人として入学しました。これから始まる県大での4年間、たくさんのおことを学び、成長していきます。

実践的な知識・技術習得のため、講義はもちろん演習科目の授業や実習が行われています。遠隔授業も取り入れながら、学びの機会を失わないよう、様々な工夫を凝らした授業が展開されています。

対面授業が基本になり、学内にも以前のような賑わいが戻ってきました。講義に実習、サークル活動など、授業にも課外活動にも忙しい県大生。同級生や県大の先輩・後輩、先生方との「輪」をつなぎながら充実した大学生活を送っています。



▲1年次IPE(Interprofessional Education)科目である、「ヒューマンケア論」の様子。様々な講演者の話を聞き、保健・医療・福祉分野における素地と広い視野を養います。



◀◀「チーム歯科医療学Ⅰ」の授業で、模型を利用して歯型を取る作業をする学生たち。手練りと機械練りで材料を練っているところです。



▲口腔保健科学専攻4年次の臨床実習の様子。歯科衛生士としての技術や、医師・患者とのコミュニケーションを実践で学びます。

学生生活編



▲学生の姿が戻ってきた大学構内。活気ある学生の声があちこちから聞こえてきます。



▲情報センターで勉強する学生たち。授業以外の時間も学業に勤しむ学生が多く見られます。

～懐かしの先生から～

卒業生・修了生の皆さまへのメッセージ

For you



卒業生・修了生の皆さま、くれぐれも健康に気を付けて、ますますの活躍を期待しています。ぜひその姿を見せに、大学に遊びに来てください。

▶本学での教員生活の思い出

川俣 卒業生の皆さん、お久しぶりです。埼玉県立大学に長く関わってきた私たち3人からメッセージを送ります。

まず、先生方は教員生活を振り返るとどんなことを思い出しますか。

添田 一番印象深い思い出は、やはり実習中のエピソードです。4年生の学生で、実習に向けてしっかりと準備をして、とても良い看護をした学生がいました。心臓カテーテル検査を怖がる幼児に、その子の好きなアンパンマンの紙芝居とぬいぐるみを作って、検査をわかりやすく説明し、検査を乗り越える力を子どもから引き出すことができました。この学生のように、子どもとしっかり関わって看護した学生たちの様子を今もよく思い出します。

学生と一緒に看護した思い出は、忘れられない大切な思い出です。実習先で活躍している卒業生の姿を見かけると、とても力強く感じ、誇らしく思っています。卒業生は大学の宝です。

川俣 非常勤教員のころは、専門領域である発達障害の作業療法を教えるだけでしたが、常勤の教員となり、運動学や作業分析学、IPW

実習などの周辺の専門科目も担当しました。

知識を広げながら授業計画を立てることになり、教えることに余裕がありませんでした。うまく教えられない自身のイライラが出てしまったこともあったと思います。それでも皆さんから「丁寧に教えていただいた」「素敵な授業だった」などの言葉をもらい、教員として成長させてもらったということが思い出です。

市村 私は20年間教員を続けてきましたが、毎年欠かさず卒業生を招き、在学生との交流会を行ってきました。今年で最終回となります。

皆さん、自分たちが学生の時に卒業生が来てくれたことをよく覚えていて、今度は自分たちが在学生のために時間を割いてくれます。毎年20人くらいの卒業生が集まり、1期生から24期生までの縦の繋がりができました。在学生は卒業生から、仕事のやりがいや魅力、就職に向けての準備など、アットホームな雰囲気を感じてもらえます。コロナ禍は、オンラインで実施しました。

埼玉県立大学に来て私が支えられたのは、卒業生と在学生との絆の強さです。これからも、このような繋がりを続けていっていただきたいと思います。

▶卒業生・修了生へのメッセージ

添田 どの現場で働いていても、どこで何をしても、皆さん一人一人が自分を大切にしている、自分のできることをしていると思います。困ったり、悩んだりしたときは、ぜひ大学に来てください。壁にぶつかったときは大学院で学び直すこともお勧めします。いつもあなたを応援しています。

川俣 卒業してから今まで、どのように過ごしてきましたか。皆さんそれぞれの路を歩んでおられると思います。再就職、転職、進学など、悩んでいる方がいたら、大学教員や事務局職員に気軽にメールや電話で相談してください。喜んで対応します。

市村 実習先に行ったとき、卒業生が生き生きと元気に活躍している様子を見て、私自身が支えられています。

コロナ禍の自粛生活であいまいな喪失を経験してきたことと思いますが、その中でも何ができるかを工夫しながら前向きに取り組む卒業生の姿勢が素敵です。これからも皆さんが元気で活躍されることを心より祈り、応援しています。

今回お話を伺った先生方



市村 彰英 教授 / 社会福祉子ども学科
2003年に着任。専門は家族臨床心理学・非行臨床心理学。



添田 啓子 教授 / 看護学科
1999年に着任。専門は小児看護学。



川俣 実 教授 / 作業療法学科
2006年に着任。専門は発達障害学・作業療法治療学・運動学。

メッセージは動画でも見られます。



いまだこでなにしてる?
卒業生の活躍



その子らしく、家族らしくある為に「PTとしてできること・ニーズは何か」を常に考えています

保健医療福祉学部
理学療法学科
2011年度卒業

鬼塚(坂本)彩花さん
ONITSUKA(SAKAMOTO) Ayaka

Profile

大学卒業後、現勤務先の東京女子医科大学附属八千代医療センターに入職し、理学療法士として勤務。2017年には認定理学療法士(発達障害)を取得した。私生活では乗り物とマンボウが大好きなわんぱく男児(2歳)の母。休日は我が子と全力で遊ぶ。

勤務先
東京女子医科大学附属
八千代医療センター

現在の仕事内容
●急性期病院における理学療法
(主に新生児・小児を担当。他、整形外科疾患・消化器内科・外科等の入院患者を担当)
●補装具や車いす等の福祉用具作成 など

私は急性期病院で0歳~90歳代の方を対象に理学療法士(PT)として働いています。特に新生児・小児分野では、様々な疾患を有する患児・家族に対し、発達段階・ライフステージを考慮し関わっています。一人ひとりに寄り添い、その子が子らしく、家族が家族らしくある為に「PTとしてできることは何か」「ニーズは何か」を常に考えています。患児・家族にとって自分が「初めて関わるPT」であり、ネガティブな印象を持たれないよう配慮しながら少しずつ関係性を深めていきます。本当の困り・想いは何かを聴取る為に、時には何も知らないふりをすることもあります。

新人時代は目の前の子に日々関わることで精一杯でしたが、経験を重ねる度にその子の数年後も目を向けられるようになり、NICU児に点滴用シーネ(点滴部位が曲

がらないようにする固定具)で装具を、重症心身障害児にうつ伏せ台を作製する等、枠に囚われずその時の自分にできる最大限の関わり方を実践するようになりました。また患児・家族にとって「退院後が新たなスタート」であることを常に念頭に置き、院内外問わず積極的な意見交換を行い、顔の見える連携を図るよう心掛けています。これは学生時代、IP演習で様々な専門職が専門性をもって連携する大切さを学んだことが基盤となっています。

卒業後10年が経ち私も母になりました。職場は先輩ママ・パパも多く、急遽休みを頂くことになってもチームを超えたフォロー体制でサポートしていただく等、働きやすい環境です。ただ、時間的制約のある中で「仕事」「育児・家庭」の両立は大変で、バランスのとり方を毎日模索しています。母にな

り、心と頭をよぎるのは、「先日、余命の話がされました。坂本さんなら延命と看取りどちらを選択しますか?」と、ある患児の母から投げかけられた言葉です。当時、様々な想いが混在し話を傾聴すること一択しかなく、母となった今でも寄り添った答えは何だったのかと考えることがあります。

学生時代、劣等生で「やめたい」と何度も思いました。しかし、大学で学んだことはどれも臨床における大切な基礎ばかりでした。学生時代に想像していた以上に人の生涯に関わらせていただく機会も多く、「患者さんのために」と様々な視点から治療を検討、奮闘する日々でやりがいも感じています。反面、患児と家族の強さに勇気を貰い、教えてもらうことも非常に多いです。患児も家族も笑顔が溢れる関わりのできるPTでありたいと思います。

PHOTO Gallery



NICUでの治療場面。職種間の垣根が低く、いつでもどんなことでも相談できるともよい雰囲気です。関わるスタッフ全員が赤ちゃん・家族を第一に奮闘する日々です。



筋ジスの子を担当した際に作製した装具。皮膚が弱く体格も小さいNICU児に合うよう点滴固定用シーネを利用し見た目が可愛くなるように工夫。



長期入院をしていた子のリハビリノート。ご家族に向けて作成したものでしたが、病棟でも現在のリハビリ内容を共有するツールとして活用してくれていました。

いまだこでなにしてる?
卒業生の活躍



子ども一人ひとりの成長を間近で見て、その手助けをできていると思ったり喜びを感じます

保健医療福祉学部
社会福祉子ども学科
福祉子ども学専攻
2018年度卒業

杉山 千花子さん
SUGIYAMA Chikako

Profile

大学卒業後、大和田幼稚園へ就職。担任・副担任などの立場で子どもと関わる。様々な性格や個性を持つ子どもたち一人ひとりへの関わり方を考え、学び、日々成長できるように励んでいる。休日は好きなバンドのライブがあると、大学の友達を誘って出かけることもしばしば。今でも連絡を取り合う大学時代の友達が多い。

勤務先
学校法人渡学園大和田幼稚園

現在の仕事内容
●クラス運営・保護者対応
●園だより・手紙・メールの作成
●行事の企画・運営 など

この仕事で喜びを感じるの子ども一人ひとりの成長を間近で見ることができ、自分がその成長の手助けをできていると思った時です。成長と一口に言っても内容は様々で、できないことがあると泣くことで訴えていた子が「手伝って」と自分から言えたこと、どうせできないから...と何でも諦めていた子が友だちと一緒に練習を重ね、鉄棒で逆上がりができるようになったことなど色々あります。

子どもの持つ力というのは大人の想像する何十倍も大きく、それを最大限に引き出せるよう環境を整え、援助をすることが保育者の仕事だと考えています。何でもできるように手を貸すことが必ずしもその子の力になるとは限らず、一人ひとりに対する適切な援助が違います。それが難しいところですが、楽しく、やりがいを感じるころでもあります。

大学の授業では座学の他、ピアノや模擬保育などがありました。ピアノは小学生まで習っていたため、苦労はしませんでした。保育現場で使うたくさんの曲に触れ、弾けるようになったことは、働き始めてからなかなか練習の時間が取れない今、私の助けとなっています。また、模擬保育では、子ども役になった同級生の前に立ち、製作を行ったときのことをよく覚えています。私が全体の前で活動に集中できていない子を注意した際、先生から「できている子を誉めることで全体を伸ばすことが大切」と指摘を受けました。当時はそれで本当に全体が伸びるのだろうかと思っていましたが、自分が実際に幼稚園で働くようになり、プラスの声掛けのもたらす力を実感することができました。今では私が日々の保育の中で大切に、意識していることの一つです。

子どもとの関わりの中で、こうすれば上手くできる!という完璧なマニュアルはありません。毎日、この声掛けで合っていたかな、もっとこうすれば良かったかなと一人反省会を開いています。そのように、日々の自分を振り返り、改善策を考えることで、より良い関わりができるようになると思っています。たくさん考えて行動した先に、子どもたちの成長や「先生だいき!」の言葉、保護者の方からの感謝には大きな喜びがあります。元気いっぱい時に予想外の行動をする可愛らしい子どもたちと一緒に遊び・学び・成長できるこの仕事は魅力的であり、これ以上ないやりがいを感じています。今後一つのやり方に捉われず、柔軟な発想で子ども一人ひとりと関わり、成長の手助けのできる保育者となるよう励んでいきます。

PHOTO Gallery



遠足で長いローラーすべり台のある公園に行きました。一緒にやろう!と子どもたちに誘われ何度も何度も滑りました。



学生時代にはAll Art Activity!!!に所属していました。この時の友達とは今でも会ったり連絡を取り合ったりしています。



好きなバンドのライブによく行きます。ライブハウスでサークルの友達とばったり会うことも!

いまどこで
なにしている？

卒業生の活躍



「この仕事で誰が笑顔になるか」を
想像しながら仕事と
向き合うことができます

保健医療福祉学部
健康開発学科
健康行動科学専攻
2011年度卒業

荒井 菜彩季さん ARAI Natsuki

Profile //////////////////////////////////////
大学卒業後、地元・埼玉県本庄市役所に入庁。7年半在籍し、区画整理事業、高校生プロジェクト、ふるさと納税等を担当。2019年に北本市役所に転職。現在はシティプロモーション、ふるさと納税を担当。中でも「屋外の仮設マーケット」をテーマとした事業に力を入れ、この取り組みをまとめた企画書が令和4年全国広報コンクールにて、最高賞の内閣総理大臣賞を受賞。

勤務先
北本市役所 (埼玉県)

- 現在の仕事内容**
- シティプロモーション事業
 - ふるさと納税 など

現在、北本市市長公室シティプロモーション・広報担当に所属し、主にシティプロモーションとふるさと納税を担当しています。本市のシティプロモーションでは、単純な人口増をめざすのではなく、市民のまちへの推奨・参加・感謝の意欲を高め、人口減少の中でもまちの活力を維持できるようにするため、「&green (アンドグリーン)」というコンセプトのもと、各種事業を行っています。仕事以外では、地元・本庄の暮らしをちょっと楽しくしようと活動する「本庄デパートメント」の一員として、主に地元産シロップを使ったクリームソーダを制作し、仲間たちと一緒に地元商店街で活動しています。仕事以外の活動を通して、様々な地域で精力的に活動する方や熱意のある他自治体の公務員の方と繋がることも多く、お互いの自治体を視察したり、交流をすることが増え、スキルアップの機会となっています。

や説明会などを行っています。また、ふるさと納税を通して、市民の皆さんのやりたいことを応援する「市民提案型ふるさと納税クラウドファンディング」制度も立ち上げ、北本発のアウトドアブランドが創設される、高齢化が進む団地の商店街にジャズ喫茶がオープンするなど、地域の活性化に繋がっています。

今の仕事のやりがいは、北本市に関わる方々と一緒に考え、進んでいけること。まちに足を運んだり、ワークショップでみなさんと顔を合わせ、対話することで、「この仕事で誰が笑顔になるか」を想像しながら、仕事と向き合うことができます。

PHOTO Gallery



北本市役所芝生広場で開催される市の魅力が集まる「&green market」は、子育て世帯を中心に多くの人でにぎわう。



「マーケットの学校」参加者のみなさん。年齢も性別も様々な方が集まり、マーケットを通して北本について考える場となっている。



「本庄デパートメント」メンバー。築100年の元料亭を改修してコワーキングスペース兼カフェとして運用。名物は地元産の果物を使ったシロップで作るクリームソーダ。

いまどこで
なにしている？

修了生の活躍



初めて子どもの出産に立ちあった時の
感動は忘れられません

保健医療福祉学研究科
博士前期課程 看護学専修
2019年度修了

矢野 敦子さん YANO Atsuko

Profile //////////////////////////////////////
大学卒業後は埼玉県立小児医療センターに就職し、小児循環器看護に出会う。卒業11年目で大学院に進学し、仕事と学業を両立しながら修了。翌年、小児看護専門看護師の認定を受ける。現在は、NICUで主に胎児診断・胎児心臓外来、看護研究指導を担当している。

勤務先
埼玉県立小児医療センター
NICU

- 現在の仕事内容**
- 病棟主任業務
 - 小児看護専門看護師としての活動
 - 胎児診断・胎児心臓外来業務 など

私は、埼玉県立大学を卒業してから埼玉県立小児医療センターの循環器病棟に就職しました。大学4年生の時に実習でお世話になった病棟です。そこでは、小児循環器看護や集中治療看護の楽しさに出会い、職場の同僚にも恵まれ、やりがいのある充実した毎日でした。もっと小児看護について勉強したいと思い、卒業11年目に埼玉県立大学院に進学しました。大学院では、小児看護専門看護師の教育課程で学びました。今までの看護実践を振り返る機会も多く、自分の看護と向き合うことで、看護の楽しさに改めて気づき、やりたいことも見つかりました。仕事との両立が大変な時もありましたが、大学院の先生方や院生仲間にも助けられ、無事に修了し、翌年に、念願の小児看護専門看護師の認定を受けました。まだ専門看護師になって2年目ですが、

自分のできることからひとつずつ始めています。

現在は、総合周産期母子医療センターとしての役割も担っているNICUで、主任業務を行いながら、小児看護専門看護師として活動しています。担当している胎児診断・胎児心臓外来では、胎児期に先天性疾患と診断された子どもやご家族が、心身に十分な準備をして出産をむかえ、速やかに子どもの治療が開始されるようにチームで取り組んでいます。ご家族が「子どもの疾患は見つかったけど、生まれる前に分かってよかった。前向きに考えることができてよかった。」と、子どもの疾患と向き合えるように看護として支援することが目標です。そのために、専門看護師として、外来のシステム作りや多職種との調整、スタッフ教育を行っています。初めて外来で担当し

た子どもの出産に立ちあった時の感動は忘れられません。

埼玉県立小児医療センターには、多くの県大卒業生が就職しています。先輩方との県大思い出話はもちろん、後輩達から県大の近況を聞くことも楽しみのひとつです。県大で学んだ「患者の立場になって考え、寄り添う看護」は、私の看護の原点であり、IPWで他学科の学生と共に学んだことは、臨床での多職種連携につながっています。多くのことを学んだ大学院時代、新たな看護の楽しさを学んだ大学院時代、ともに私の看護師人生にとって大切な時間です。これからも、小児看護専門看護師として、子どもと家族が頑張る力を支えられる看護師でありたいと思っています。

PHOTO Gallery



仕事を続ける秘訣は、オンとオフの切り替え。コロナ禍が明けて、海外旅行に行ける日が待ち遠しいです。



胎児診断・胎児心臓外来は、今の私のやりがいのひとつです。スタッフ一同、より良い外来にしようと試行錯誤中です。



大学院の修了式がコロナで中止になりました。これも、ひとつの思い出。早く院生仲間とお祝いしたいです。

特色ある研究活動

STUDY's POINT: 看護師としての経験を積んで改めて学びなおすことで、新しい自分を発見できるかもしれません

STUDY's THEME:

看護研究によるチャレンジ

看護は目に見えず、患者・家族などの関連要因がたくさんあって、その実態を示すことは非常に難しいものです。目に見えないための、時には蔑ろにされてしまうこともあるかもしれません。でも、病と共に生きる人にはなくてはならないのですし、臨床にいる皆さんにとっては実感していることでしょう。臨床の看護に関して疑問や課題を感じていても、研究に取り組もうと思えないのは、このような難しさがあるからかもしれません。

私はこれまでいくつかの研究に取り組んできましたが、順調に展開したことはありませんでした。それでも看護研究を続けるのはどうしてなのかと自問自答することもあります。とはいえ、少しずつわかってきたことや、看護に役立つと思えることが発見できました。例えば、ホルモン治療を受ける乳がん患者様に、治療との付き合い方をサポートするサイトを作りました。

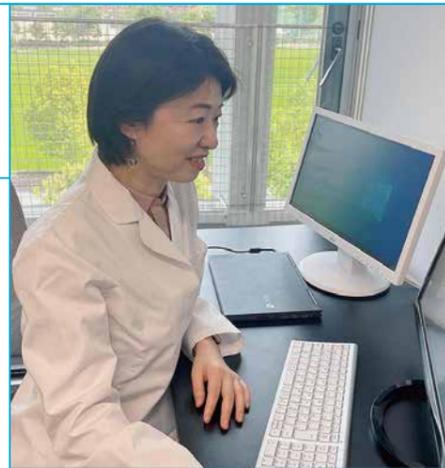
このサイトを活用することで、症状が緩和することや、生活上の悩みが和らぎ、医療への満

足度も維持されることがデータ分析からわかりました。

また、忙しい医療現場では、看護についてじっくり考えたり、自分の看護を語る機会は少ないと思います。でも、立ち止まって自分の看護や悩みについて一緒に考える機会があることで、明日の元気につながることもあります。そのため、がん看護専門看護師や認定看護師の方たちと研究会を立ち上げて、リフレクションを用いた研修会を行い、その効果を検証しています。このリフレクションの研修会に参加した看護師のストレスが緩和することやレジリエンスが高まることが研究結果からわかってきました。看護師の皆さんがエンパワメントされると、医療の質も向上していくと考えています。

看護研究は敷居が高いと思っているかもしれませんが、目の前にある課題や悩みを一緒に考えていくプロセスでもあります。考えること、新たな発見があることが好きな方は研究に向いているかもしれません。

そして、研究のアプローチだけでなく、専門



埼玉県立大学 保健医療福祉学研究所 / 研究開発センター

飯岡 由紀子 教授

IIOKA Yukiko

看護師として臨床で活躍している先輩もいます。皆さんもこれからのキャリアについて考えることがあるでしょう。看護師としての経験を積んで改めて学びなおすことで、新しい自分を発見できるかもしれません。この記事が皆さんにとって、何かを考えるきっかけになれば嬉しいです。

▼乳がん患者様向けサイト

ii-navi

登録すると、できること

- 自分の心から悩める仲間とつながる
- みんなの悩みや経験がアドバイスになる
- 看護師やヘルパーとつながる
- 医師が目の前で相談できる
- 最新の情報、最新のトレンドを見られる

<https://ii-navi.jp/>

▼リフレクション研究会

EOLリフレクション研究会

<https://eol-reflection.amebaownd.com/>

理事長コラム



Profile

公立大学法人埼玉県立大学理事長 / 慶應義塾大学名誉教授
現在務める主な公職は、社会保障審議会会長(介護給付費分科会長・福祉部会長)、医療介護総合確保促進会議座長、協会けんぽ運営委員長。

県大卒業生の力が活きる地域包括ケアシステム

2040年過ぎに想定される超高齢社会のピーク、少子傾向からの脱却、経済格差拡大に起因する社会不安リスクへの対処など、我々に課せられた課題はいずれも一筋縄では解決できません。これらの課題に立ち向かうための有力ツールの一つとして、地域包括ケアシステムの構築・展開が国策となっております。その定義は次のように表されます。

「日常生活圏域を単位として、何らかの支援を必要としている人々を含め、誰もが、望むなら、住み慣れた地域の住みかにおいて、自らも主体的な地域生活の参加者として、尊厳を保ちつつ安心して暮らし続けられるための仕組み」

地域包括ケアシステムのコアは、医療・介護・保健専門職の協働と客観的評価です。リハビリテーション・栄養ケア・口腔ケアの連携もますます重視されるようになりました。加えて、日常生活支援も欠かせません。さらに、経済格差拡大も主因となる複合課題や地域からの孤立問題に対処し、包摂の工夫によって共生社会実現を目指すにあたっては、社会福祉分野の力にも期待が高まっていることを強く感じます。

前述のいずれも、まさに本学での学びを活かす分野です。皆さんの一層の活躍を社会が待っています。



就労支援講座や3Dプリンタ活用講座等を新規開催、

「埼玉県立大学オープンカレッジ」がスタート!!

本学では開学以来、各種公開講座を開催してきましたが、様々なニーズが寄せられる中で、キャリアアップ・スキルアップにつながる講座を求め声が高まってきました。そこで2022年度から、卒業生支援や専門職スキルアップの一層の充実を図った「埼玉県立大学オープンカレッジ」を新たにスタートしました。

「埼玉県立大学オープンカレッジ」は、一般の方や専門職の方に学習機会を提供する、地域・社会に開かれたもう一つの大学を意味します。新規講座として「就労支援講座(社会福祉)」や「3Dプリンタを活用した自助具作製(作業療法)」を開催する等、今まで以上に皆さまのニーズに応える様々な講座を企画してまいります。

時々オープンカレッジのページをチェックして、興味のある講座がありましたら、是非、参加してみてください。皆さまのご参加をお待ちしております。

オープンカレッジの講座種別

- 一般教養講座
- 小・中・高校生講座
- 卒業生等支援講座
- 専門職スキルアップ講座
- 専門職連携を学ぶ講座 など

オープンカレッジ
一覧はこちら



<就労支援講座レポート>

2022年6月、障害者就労支援の現場で働く卒業生の支援スキルの向上と、就労支援ネットワーク構築を目的とした「就労支援講座(講師:社会福祉子ども学科 朝日雅也教授、富田文子助教)」を開催しました。参加した卒業生からは「就労支援の課題の共有や解決に向けたヒントを得ることができた」、「同じ課題に取り組む卒業生と交流できたことで、明日からの就労支援に一層取り組める」といった感想が寄せられるなど、卒業年度、経験年数や活動地域の違いを超えた情報共有、経験交流の機会となりました。



▲講座の様子(写真左奥が富田助教、右奥が朝日教授)

武蔵野銀行と共同で「笑顔はつらつ健康体操」イベントを開催しました



▲講師に合わせて運動する参加者の皆さま



▲講師の菊本准教授と協力学生2名

本学と武蔵野銀行は、2022年6月に産学連携の一環として、「笑顔はつらつ健康体操」イベントを武蔵野銀行本店(さいたま市)で開催しました。「笑顔はつらつ健康体操」は、武蔵野銀行からの「埼玉県民の皆さまがいつまでもはつらつと笑顔で健康に過ごせるように」「銀行の待ち時間にできるような手軽で簡単さ」をコンセプトとして発案された、生活習慣病の予防効果が期待できる体操です。本学の菊本東陽准教授(理学療法学科)により、2014年から考案・開発が始まり、現在では全30パターンの体操があります。

イベント当日は梅雨寒のあいにくの天気の中でしたが、健康維持・増進に関心のある約30名の方々にご参加いただきました。菊本准教授が講師を務め、本学学生2名の協力のもと入門的な6つの体操を実践しました。参加者からは「呼吸法など簡単な運動なのに、しっかりやると少し汗ばむくらいいい運動になった」「大学の先生の話聞く機会はありませんので、知的な刺激も受けた」「知り合いにも声をかけてまた参加したい」等の感想をいただきました。

本イベントは今後も定期的に開催予定です。本学は引き続き、様々な企業や行政機関等との連携を通じて、地域に根差した大学を目指してまいります。

生涯アップデート

いま大学は、少子化に伴う受験生の減少と社会人の学び直しやリカレント教育の推進という大きな変革の時代を迎えています。受験生とアドミッション・ポリシーのマッチングの強化や学部・大学院教育の連動性、大学院教育の実践者向けカリキュラムと短期の履修証明プログラムの充実など、学部・大学院一体改革の検討を開始しました。卒業生・修了生の皆さんがいつでも母校に戻り、生涯にわたるアップデートできる環境を整備し、「SPU魂、連携と絆」をより強くしていきます。ご期待ください。

新型コロナウイルスの感染状況は未だ終息を見ませんが、科学的エビデンスと社会経済活動のバランスを踏まえ、本来あるべき学生の学びの場、学習コミュニティの再建を4月から開始しました。対面授業やサークル活動など、学内活動の再開です。人気(ひとけ)の少なかった大学から、学生が行き交う日常の大学へ変わりました。大学は建物ではなく、学生・教職員、学生・学生の交流の場であることを実感しました。



Profile

2007年に埼玉県立大学に就任。理学療法学科長や地域産学連携センター所長を歴任し、2021年から現職。



ご寄附のお願い

本学の活動にご理解をいただき、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

寄附の目的

寄附金は次の目的に活用させていただきます。

- ① 教育及び研究の支援
- ② 学生の支援
- ③ 国際交流の支援
- ④ 地域貢献の支援
- ⑤ その他大学活動の支援

寄附金額

おいくらからでも結構です。

※金額の目安 【個人】5千円 【法人・団体】5万円

お申込み・お支払い方法

① インターネットによるお申込み

二次元コードの読み込み、または (<https://www.spu.ac.jp/donation/>) にアクセス (クレジットカード決済、コンビニ支払い、ネットバンキング (Pay-easy) 決済が可能です。)

② インターネット以外のお申込み方法

事務局 財務担当までお問い合わせください。

TEL 048-973-4110

E-mail zaimu@spu.ac.jp

インターネット
申込み



寄附者の顕彰等

- ① イベント案内・収支報告をさせていただきます。
- ② ご芳名をホームページに掲載させていただきます。
- ③ ご芳名を銘板に刻み学内に掲示させていただきます。
※ご寄附の合計額が個人10万円以上、法人・団体50万円以上の方
- ④ 感謝状を贈呈させていただきます。
※1年間のご寄附の合計額が個人100万円以上、法人・団体300万円以上の方

税制上の優遇措置があります

この寄附は、住民の福祉の増進に寄与するものとして、税制上の優遇措置があります。

(個人からのご寄附)

1 所得税

寄附金額 (総所得金額の40%が上限) から2,000円を差し引いた額が当該年の課税所得から控除されます。

2 住民税

寄附した翌年の1月1日現在、越谷市にお住まいの方は、寄附金額 (総所得金額の30%が上限) から2,000円を差し引いた額の10%が、寄附した翌年の個人住民税から控除されます。
※越谷市を除く埼玉県内にお住まいの方は4%の控除となります。

(法人・団体からのご寄附)

全額損金算入が可能です。

活用実績

寄附金は寄附の目的に沿って、より充実した大学活動の実施のため、多岐にわたる分野で活用させていただいております。

2021年度

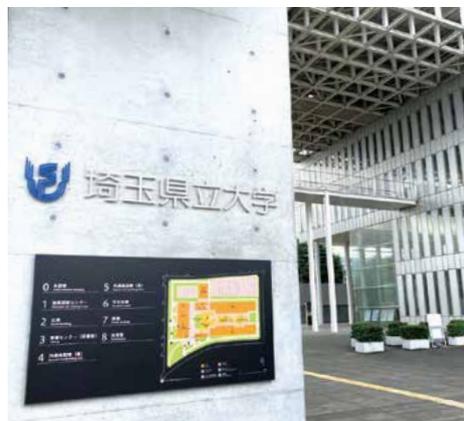
- 学生希望図書購入
- 地域貢献活動 (学外向け講座) の実施
- 教育活動に必要な消耗品の購入 等

2020年度

- 遠隔授業実施に伴う学生支援
- 学生希望図書購入 等

2019年度

- キャリアセンターの設置
- エントランスエリアの整備
- 創立20周年記念誌の刊行 等



エントランスエリアの整備



キャリアセンターの設置

